

成功の原点と 彼なりの散り際

競走馬時代、数々の大レースを制し成功を収めたサンデーサイレンス。しかしながら、故障により引退した後、アメリカに別れを告げ種牡馬生活を日本で過ごすこととなった。これが大成功をおさめた“原点”であり、ある意味“すべて”だったのかもしれない。そこで、繋養先である社台スタリオンステーションでの生活、さらに最期まで必死に闘った生き様をも含めて、これほどまでに成功を収めた経緯を振り返ってみよう。



●来日の流れ

かつて日本は「種牡馬の墓場」と言われていた時代があった。大金をかけて著名な馬を買って漁ってきても、ほとんどの種牡馬たちは目立った産駒を残せないままに消えていく。もちろんその産駒が欧米のレースに出走するようなこともないので、欧米ファンはその子孫を見ることができないし、血がフイードバックされることもない。ジャパンマネーの威力が猛威を振るっていた時期だっただけに、皮肉交じりにそう言われた部分もあった。

だがこの批判はあまり的を射たものではなかった。欧州から買われてくる種牡馬は、たしかに著名馬ではあったが、すでに種牡馬としては終わっていた。レベルの馬ばかりだった。可能性のある種牡馬を日本に放出することはほとんどなかったのだ。その後成功した欧米産の種牡馬は、ノーザンテストやリアルシヤダイのように、1歳時に将来、種牡馬にすることを見込んでセリ市で購買した馬だった。名馬を所有している大オーナーはみんなお金持ちで、いくらジャパンマネーを積んでも、売却に首を縦に振ることはなかったのだ。米国の場合も、種牡馬入りに際してウイルス性動脈炎の予防接種を義務付けている州が多かったために、当時は防疫上の問題でそのような種牡馬を輸入することができなかった。

その意味で、サンデーサイレンスは日本に初めて導入された、真正正銘の大物種牡馬だったと言えるだろう。日本の馬産の実力が正しく試される初めての機会だったのだ。それだけに絶対に失敗はできなかったし、世界にその実力を示す絶

好の機会でもあった。

サンデーサイレンスの導入が成功できたのは、社台グループの力と運が、非常にうまくマッチした結果だった。

サンデーサイレンスが生まれたのは米国・ストーンファーム。そのオーナーであるアーサー・ハンコック氏は社台ファーム・吉田照哉氏とは旧知の仲だった。吉田照哉氏が米国でフォンテンブローファームを任されていた時に、同じ大牧場に生まれた長男同士、将来の夢や悩みを語り合った。サンデーサイレンスは2度、セリ市に上場されたが、当歳時にはひどい下痢で生死の境をさまよったり、1歳時にも馬運車の事故で大ケガをするアクシデントがあったために、馬体は傷だらけ、体は細く脚が長い、ヒョロヒョロ体型、しかも血統もそれほど目立つ馬ではなかったために売れ残ってしまった。仕方がなくハンコック氏が自分で走らせることになったわけだが、入厩し、さらに共同馬主となったのはウィットニングハム調教師。彼もまたゴールデンフェザントを管理していたなど、吉田照哉氏と親しい関係にあった。

そのため吉田照哉氏は3歳3月に初めてサンデーサイレンスを見た時から、ハンコック氏から購買を薦められていた。米2冠、ブリーダーズCクラシックを制した後、4歳1月になって父・吉田善哉氏も渡米しサンデーサイレンスを見て、



1991年にアメリカから日本へやってきた直後、社台スタリオンステーションにて

正式に購買のGOサインが出された。特にサンデーサイレンスが気に入っていたわけでも、種牡馬として絶対に成功する自信があったわけでもなかったのだが、これだけの成績を残した馬を現役上がりで買えるチャンスなどこれまで一度もなかった。金額も条件も関係なしに飛びついたのだ。

この時に買ったのは権利の4分の1(250万ドル)だった。この時には日本に持ってこれれば最高だが、米国で供用されることになっても仕方がない(吉田照哉氏)という程度の気持ちだった。その後、脚部不安で引退したサンデーサイレンスはストーンファームで種牡馬入りする予定だった。だが、米国生産者の反応は冷たかった。同時期に引退したライバル・イージーゴーアールはあつという間に申し込みが満口になったのに対し、サンデーサイレンスへの申し込みはわずか2頭だけ。頭を抱えたハンコック氏にとって、社台ファームへの全株譲渡しか道がなかった。

危機一髪だったのは、種牡馬入りに際してウイルス性動脈炎の予防接種が行われそうになったこと。もし打ってしまったら日本への輸入はできない。だがこの情報も4分の1の権利を所有していた社台ファームに事前に連絡があったため、接種の前日にストップをかけることができたのだ。

購買価格は1100万ドル(約16億5000万円)、シンジケートは総額25億円(1株4150万円で60株)。もちろん日本最高額トレードだったわけだが、当時の日本はバブル景気の真っ盛り。直前に輸入されたバイアモンの購買価格が650万ドルでシンジケートは15億円。同年のオグリキャップが18億円、アイネスフウ

サンデーサイレンス Sunday Silence 種牡馬時代

日本に初めて導入された、真正正銘の大物種牡馬。もしアメリカで供用されていたら失敗していました」

ジンが10億円でシンジケートされたことを考えても、サンデーサイレンスの購買価格、シンジケートはそれほど「高い」というイメージではなかった。当然、シンジケートは募集開始と同時に満口となり、社台が所有するはずだった株(30株)を回したり、1株を半分にして対処するなど、馬産地は騒然とした騒ぎになったものだった。

その後のサンデーサイレンス産駒の活躍についてはいままら説明するまでもないだろう。この成功は、もちろんサンデーサイレンス自身の資質による部分が大いわけだが、「もしサンデーサイレンスが米国で供用されていたとしたら成功しましたか？」という問いに、吉田照哉氏は「失敗してしまいました」と即答した。米国の交配募集当初の申し込みが2頭だけだったことを考えても、サンデーサイレンスが米国では種牡馬としてそれほど期待されていなかったことははっきりとしている。そのまま供用されていたとしても、交配頭数はもちろん少なかっただろうし、交配牝馬のレベルも低いものだったと想像できる。

種牡馬の成否は、交配牝馬の頭数とレベルに大きく左右される。サンデーサイレンスの初年度産駒からはフジキセキ、ジェニユイン、タヤスツヨシ、ダンスパートナーなどの活躍馬が輩出されたが、これらはいずれも千歳・社台ファームの生産馬だった。千歳・社台ファームの社長はサンデーサイレンス導入の立役者である吉田照哉氏である。「最高の繁殖牝馬をすべてサンデーサイレンスと交配させた」という意気込みが、この成功を呼んだのである。

サンデーサイレンスが日本の競馬界に残した遺産は山のようにある。日本産馬

●死亡の経緯

サンデーサイレンスに異変が現れたのは、種付けシーズン中の5月5日だった。右前肢に跛行が見られて、今シーズンの種付けは159頭を行った時点で中止した。休養したことで一旦は回復したものの、5月10日に再発。検査の結果、右前肢深屈腱鞘の感染性腱鞘炎と診断された。

傷口から肢に細菌が入る「フレグモネ」はサラブレッドでは一般的に起きるが、深屈腱鞘まで入り込むことは極めて希少な症状だった。通常のフレグモネならば抗生物質の投与で完治するものだが、腱鞘には血管が少ないために抗生物質の効果が現れにくい。細菌が入り込んだ外傷が見当たらず、腱鞘炎の原因が特定できなかったことも、治療を難しくしていた。対症療法としては患部を切開して洗浄するしかなかったのだ。

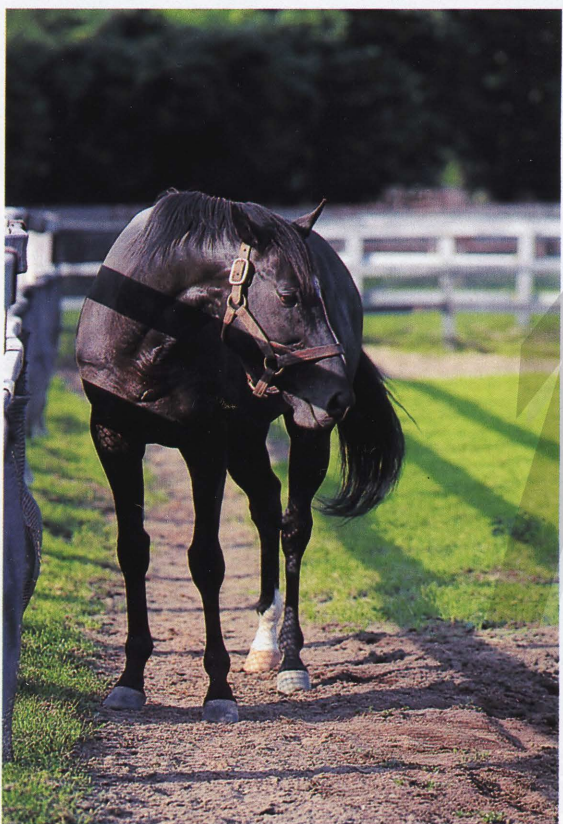
英国からこの病気の権威を招いて6月23日、7月6日に手術を行ったが、症状は改善されなかった。7月18日の3度目の手術後、ようやく回復の兆しが見えてきた。痛みが薄れ、患部の腫れも小さくなっていった。社台スタリオンSの関係者にも安堵感が広がり、抗生物質の投与量も減らすことが検討されていた。深屈腱が断裂していたため、後遺症が残っても生活に支障がないように、新しい馬房を作ることも計画された。あと少しのところで奇跡が起ころうとしていたのだ。

だが最初の病気発症から3カ月が経過していたことにより、今度は患部の右前肢をかばっていた左前肢が悲鳴をあげてしまった。8月5日、ついに左前肢が蹄葉炎を発症してしまつたのだ。蹄葉炎の

牧場で元気に走り回る姿は、現役時の激しい走りとはひと味違った、貫録が漂っていた



頑張りすぎるほどに頑張った。だが敵はこれまでに
対戦したことがないほどの
強敵、不治の病・蹄葉炎……



発症は、腱鞘炎発病当初から最大の懸念事項だった。そのため、右前肢にはかかと部分にラバーを付けて高くした特殊蹄鉄を履かせて着地できるようにし、左前肢の負担を軽減させる措置が早くから取られてきた。スタッフも24時間態勢で看護を続けてきた。だが3カ月はあまりにも長すぎた。通常のケースなら1カ月で蹄葉炎を発症しても不思議ではない。だ

成功の原点と彼なりの散り際

が、サンデーサイレンスの驚異的な体力が発病を遅らせていた。これだけでも十分、奇跡的なことだった。
ある意味、死刑宣告である蹄葉炎を発症してからも、サンデーサイレンスは懸命に闘い続けた。蹄葉炎の痛みがどれくらいひどいものか、人間にはなかなか想像しにくい。蹄葉炎が直接地面に着いて、体重がかけられている状態を考えると

「こんな種牡馬はもう2度と出ない」と関係者の誰もが口を揃えているが、私自身はきつとまた「100年に1頭の名種牡馬」が数年後に出現する気がしている。かつては『シンザンを超える』が日本競馬のテーマとなつてレベルアップが進んだが、今は「サンデーサイレンスを超える」という新たな目標が、生産地を、そして競馬界全体を刺激していくはずである。
「痛い。痛さのあまり精神的に障害が出る馬もいるほどだ。横になれば少しは楽なはずなのに、一度横になつてしまつたら、二度と立ち上がることができないことを悟つていたサンデーサイレンスは、脚を踏ん張り、立ち続けた。ずっと舎飼いが続いていたからストレスも溜まっていたはずだし、運動不足で食欲もないはずだったが、それでもサンデーサイレンスは飼葉を食べ続けていた。食べなければ体力が落ちていくことも十分に知っていたのだ。当歳時にはひどい下痢で獣医師から見放され、1歳時は馬運車の事故で重症を負つたが、死の淵から蘇つてきた。そんな名馬だけが持つ驚異的な生命力、精神力、闘争心が、サンデーサイレンスを支えていた。
それがついに限界に達したのが、8月19日だった。午前9時、サンデーサイレンスは倒れるように横になり、「フット」と大きなため息をついた。それから張り詰めていた緊張の糸が切れたかのように、急激に衰弱していった。そして午前11時、眠るように息を引き取った。16歳だった。
世界最高レベルを誇る社台グループの獣医師スタッフはやれるだけのことはすべてやった。サンデーサイレンスも本当に、頑張りすぎるほどに頑張った。だが敵はこれまでに対戦したことがないほどの強敵、不治の病・蹄葉炎だったのだ。この結末は、サラブレッドの宿命、生き物を扱っている者の宿命でもあった。「仕方がない」とは言いたくないが、それでも仕方がないことだった。
サンデーサイレンスの遺骨は、社台スタリオンS敷地内の、故・吉田善哉氏の遺品が埋められているスペースの横に、関係者の手によって埋葬された。

のレベルを世界のトップにまで高めたこと、日本の競馬に世界中のホースマンが注目するようになり、セレクトセールには世界からバイヤーが訪れ日本市場が国際化されるようになったこと、3億円を超えるような産駒も登場し日本産馬の価格を底上げしたこと、世界の血統地図にサンデーサイレンス系を作り上げたこと……。これらについてはすでに色々なところで書かれているので触れないが、もうひとつ、意外な真実がある。種付頭数の限界を引き上げたことだ。
これまで100頭を超える交配は「酷使しすぎ」と言われていた。ところがサンデーサイレンスは多い年で、200頭を上回る交配をこなし続けた。抜群の体力、内臓の強さがあり、またサンデーサイレンスと交配する繁殖牝馬は最高の状態で種付けにやってきたために受胎率も高かったこともあるが、生産界の常識を覆してくれたことは間違いない。今ではサンデーサイレンス以外でも200頭を超える交配が珍しくなくなり、今春もフジキセキなど4頭が200頭超えを達成している。英国などではこういった多頭数交配に反発する動きもあるが、優秀な種牡馬をフルに活用することは、厳しい状況に置かれている生産界にとっては何よりも救いとなっている。